

滑稽俳句作法

草薙一朗

口上

昨年某日の朝、八木会長から「滑稽俳句」について何か書きませんか、とお電話をいただきました。電話を終わって、今日は冬至の日と思ひ、次の一句を思ひ出しました。

匂ひ艶よき柚子姫と混浴す 能村登四郎

多くの名吟を残された氏は真の伝統作家というものは明日への創造をなし得る人」の言葉を残された。「滑稽俳句」をやるからには、掲句のような上品な作品を作りたいと切に思った。

☆☆☆ ☆☆☆

「滑稽俳句」の作句術については、誠に有難いことに、すでに先達の八木会長が「八木健の滑稽俳句術」にまとめておられる。

(協会報第二号付録)。

そこには「言葉遊び」「感じたままを描く」「客観写生」「裏切り構成」「なんでもないこと」「文字の発見」「謎々俳句」「誇張」「真実の発見」「擬人化」「非科学的」「心の描写」「哀感が透ける」「瞬間を描く」「俗語を・・・」の各種技法があり、協会報そのものに「滑稽俳句術」等が連載中でありますので、先づそれを拳拳服膺することが大切と思います。

会長の各種技術集成を拝見したとき、私がすぐ思い出したのは、往年の推理文壇の大御所・江戸川乱歩氏の「類別トリック集成」でした。

乱歩氏は多くの独創的な作品を物されましたが、海外を含めて古往今來の探偵・推理小説に通曉され、小説の核をなすトリックの一覧表をつくられたのです。私自身は小学生の頃から氏の「怪人二十面相」に惹かれました。

乱歩氏によれば、秀れた推理小説とは

- 一、冒頭における謎の提起
- 二、中間におけるサスペンス
- 三、結末における意外性

の三要素を兼備したものであるという。

俳句を始めてからの私の脳裏にいつもこの三要素がありまして、俳句の構成にどこか似ているのではないかと考えて来ました。

俳句の上五、中七、下五をそれぞれ右の三要素に移行置換して句作できないか。読み手をはっとさせるような発想の語を上五に取り入れる。これを受けて中七で口調よく畳み掛け、意表を突いた下五で結ぶ。

推理小説から考えた私の句作法、「推理小説的句作法」と名付けて一人で悦に入っておりました。この句作法を少し「滑稽俳句」の方に応用してみませうか。

先づ上五ですが、短歌の世界では「初句は常に唐突である」という名言があようです。初句では思い切った冒険をしようという訳です。「滑稽俳句」における冒険とは。そして中七の「勢ひ」去来は「句に句勢といふあり、文は文勢、語は語勢なり」と言っています。

そして下五の意外性、漫才作家の秋田實氏は落語の真味はオチによって決定する。オチを知らずして落語講ずるなかれ」と書いておられるのです。

ここで会長の一句をお借りしましょう。

新米と呼ばれ直立新社員 八木健

「新米」と上五に置かれると、読み手は先づ 季語の「新米」を、そこへ「呼ばれ直立」と畳み掛け〔新社員〕という本来の季語で結ぶ。「新米」が今年米と「新参」の意を複合した面白さ。「新社員」の落ちの面白さにはペーソスまであります。

(マーク・トウエイン曰く、「人間世界のことはすべてうらがなしい」。ユーモアそれ自体のかくれた源は、喜びではなく、悲しみだ)。

推理小説に「変格もの」のある如く、上五、中七の組合わせで「変格滑稽俳句」も出来るのでは。ここまで来て 自句自解や「パロディー論」に触れたいのですが、すでに紙幅が尽きました。「ぼくは子規の写生以来失った贅沢と滑稽をもう一度俳句に取り戻したい」との森澄雄氏のお言葉をお借りして失礼いたします。

もう、しんねりむつつり俳句とはお別れ致しませう。では又。

(平成二十一年一月記)